

だいろくしょう 第六章

みやこ とうちやく 都に到着

間もなくゆきは都の門に着きました。

「こんにちは。私はゆきと申します。どうぞよろしくお願ひします」とゆきは門番に言ひました。

「なんで君のような子がこの町に一人で来るんだ」と門番は言ひました。

「幸せを探するためです」とゆきは答えました。

「では、この町に仕事があるんだな」と門番は言ひました。

「そうです。あっ、それと、この手紙を温泉の女将にさしあげることになっているのです」とゆきは門番に手紙を見せながら言ひました。

「それが本当なら、町に入っても構わない。しかし、もし三日以内に仕事が見つからなかったら、町を去らなければならんぞ」と門番は言ひました。

「はい、分かりました。すみませんが、温泉はどこですか」とゆきは聞きました。

門番が道順を教えた後で、ゆきは間もなく温泉に来ました。

「ごめんください」とゆきは呼びました。

「いらっしやいませ」と女将は返事をしながら、出てきました。

「こんにちは。私はゆきと申します。女将さんに話をさせていただいても宜しいですか」とゆきは聞きました。

「こんにちは、ゆきさん。私が女将です」と女将は言ひました。「いかがなさいましたか」

「実は、旅路で、とある商人さまと出会いました。商人さまは、この手紙を温泉の女将であるお姉さまに渡してくださいと言いました。こちらをどうぞ」とゆきは手紙を女将に渡しながらい言いました。

「どうぞ上がってください。その間に読んでおきますから」と女将は言いました。

「お邪魔します」とゆきは言いました。

「ああ、弟はあなたのお手前は素晴らしいと書いております。その手並みを拝見したいと思います。弟から貰った、その新しい絹の着物を着た後で、茶の湯を点てください。もしあなたが弟の言う通りの方なら、ここで雇いますよ」と女将は言いました。

「はい。でも、私は少し汚れております。こちらの新しい絹の着物を汚したくないと思っていますのすが」とゆきは言いました。

「あ、そうですね。どうぞ、あちらがお風呂になっています」と女将は言いました。

お風呂に入って絹の着物を着てから、ゆきはお点前を披露しました。それを見届けてから、女将は、「どうやら弟が申ししていたよりも、ゆきさんの茶の湯の腕は達者のようですね。こんなに素晴らしいお手前を、十五年以上もの間見たことがありません。失礼をいたしました。どうぞここにお留まりください」と深い会釈をしながら言いました。

「どういたしまして。誠に粗末なものでしたが」とゆきは言いました。「よろしければ、ここで勤めさせていただきたいと思ひます。でも、私はこの町に着いたばかりです。住まいもなく、お金もありません。こちらに貝から見つけた真珠が少々あるだけです」と、ゆきは懐から真珠を取り出して言いました。

「それでは、その真珠を使って首飾りを作ると良いでしょう。ここにある部屋に住んでも結構です。明日、私とゆきさん、二人で一緒に買物をしましょう。

しんじゆ くびかざ つく ほうせきしょう い きぬ きもの すこ か おとうと
真珠の首飾りを作るのに宝石商に行ったり、絹の着物をもう少し買いに弟の
みせ い おかみ い
店に行ったりしましょう」と女将は言いました。

「しかし、お金がありません」とゆきは言いました。

しんばい かね わたし か まちいちばん さどう か
「心配しないでください。お金は私がお貸しします。この町一番の茶道家なん
かえ で き おかみ い
ですから、すぐにも返すことができますよ」と女将は言いました。